

青少年の地域活動による自立支援と地域の大人の役割 社団法人全国子ども会連合会

1. 趣旨

地域の子ども集団に関わる地域リーダーが活動を通じて、自己有用感を育み、将来の自己像を描き、進路を決めて、自立していくことをねらいとする。また、地域の大人たちが中・高校生に対して、地域活動参加をもとにどのように自立を援助していくのかを地域活動プログラムとして位置づける等を協議し、青少年の地域活動の有意性を検証する。

具体的には、啓発活動として基調講演とシンポジウム、地域における異年齢集団での活動を通じて、自己有用感をどう育むかを検証し、この検証結果を全国的展開をするために青少年の自立支援研究大会を開催し、協議しあい普及活動をしていく。

2. 活動実施期間，場所

平成19年2月10日～11日 青少年の自立と地域の大人の役割研究大会

場 所：富山県富山市 富山県民会館

参加者数：770名(富山県外521名、富山県内249名)

3. 広報活動，普及活動の概要

本研究会は、年1回の全国展開の事業である。その趣意・内容を平成19年度に全国9地区で実施する「地区子ども会育成研究協議会」にて報告をすることを通じて啓発を行う。今回、只野文哉博士の許可を得て「好きの発見・触発教育」という言葉を使うことができ、さらに田島信元教授の監修を得て、小冊子「育つ力と育てる力」を作成し、参加者に配布した。

4. 試みと成果、課題

啓発資料の作成は、内容を項目ごとに整理し、1項目を見開きで完結するようにした。コピーして資料にすることが出来るように配慮したものである。また必ず挿絵を入れて、イメージ化を図った。読みやすく学びやすいとの感想を得ることができている。1,000部作成したが、この冊子をもとに人間が本来持っている「育つ力」をどのように育てていくのかを地域の大人たちが考えあうきっかけとなることを願っている。さらに、研究大会参加者が全国各地にて、育つ力と育てる力が啐啄同時に作用しあうよう地域の教育力を高めることが課題である。

5. 特徴

講演内容の理解につながるよう、事前に基調講演の内容を開催要項にまとめておいた。また、啓発資料である【育つ力と育てる力】をテキストとして普及させることをねらいとしている。

事業の特色

「育つ力と育てる力」というわかりやすい言葉を使用し、子どもの潜在能力を引き出すことについて啓発しようと取り組んだ。只野博士の「好きの発見触発教育」という造語を啓発することができた。

運営体制

- 白百合女子大学教授（臨床発達心理士・学校心理士） 田島 信元
- 目白大学進路指導課長 鈴木 匠
- SK研究所所長 北島 貞一
- NPO法人ヒューレック研究会 顧問 金井 省吾
- 余暇開発士・新BOP指導者 高橋 裕香子
- 全国子ども会連合会専門委員 岡村 誠
- 全国子ども会連合会専門委員 河村 隆
- 全国子ども会連合会専門委員 小菅 知三
- 全国子ども会連合会専門委員 村上 長彦

の9名に委員をお願いし、事業全体の計画と小冊子作成の委員会をもって運営した。

広報活動、普及活動の実施

月 日	内 容（実施場所、参加者数、指導者数、資料等配布先 等）
平成18年	
8月20日	第1回企画委員会 委員長に小菅知三氏を選出 青少年の自立支援企画内容の検討 出席委員9名(全国子ども会ビル2階会議室)
9月 1日	第2回企画委員会 青少年の自立支援研究大会企画会議 シンポジウムと部会構成内容の検討 育つ力と育てる力小冊子内容の検討 小冊子作成担当金井省吾、田島信元、北島貞一3氏とした 出席委員9名(全国子ども会ビル2階会議室)
9月10日	第3回企画委員会 青少年の自立支援研究大会企画会議 大会企画決定、開催要項作成 出席委員9名(全国子ども会ビル2階会議室)
平成19年	
1月30日	第4回企画委員会 青少年の自立支援研究大会運営マニュアル検討 部会資料確認 出席委員9名(全国子ども会ビル2階会議室)
2月10日 ～11日	青少年の自立支援研究大会 シンポジウム等の指導 田島信元、北島貞一、鈴木匠、岡村誠、菌田碩哉、 金井省吾、脇恵、株式会社ワコール
2月20日	第5回企画委員会 青少年の自立支援研究大会評価会 出席委員9名(全国子ども会ビル2階会議室)

平成19年2月10日～11日

青少年の自立と地域の大人の役割研究大会

場 所：富山県富山市 富山県民会館

参加者数：770名(富山県外521名、富山県内249名)

指導者数：8名(基調講演講師、シンポジウム担当講師)

資料配布：育つ力と育てる力「啐啄同時」=好きの発見触発教育による青少年の自立支援=と開催要項を参加者・スタッフに配布する。



開会式で挨拶する町村会長

プログラム：

2月10日 午後3時～5時30分 富山県民会館ホール

基調講演：子どもの自立を促す=育つ力と育てる力= 白百合女子大学教授 田島 信元

2月10日 午後5時30分～6時15分 富山県民会館ホール

事例研究：富山県出前活動支援 富山県児童クラブ連合会事務局長 中村 一雄

2月11日 午前9時～12時 富山県民会館研修室501室 参加者161名

基調提案：自己有用感を育む地域活動 SK研究所長 北島 貞一

シンポジウム：大学にみる進路指導状況、地域調べ活動と自己有用感、インターンシップ活動と自己有用感

目白大学進路指導課長 鈴木 匠

東京児童相談所 岡村 誠

実践女子短期大学教授 藺田 碩哉

ヒューレック研究会 金井 省吾

東京女子医科大学講師 脇 恵

SK研究所長 北島 貞一

2月11日 午後1時～3時30分 富山県民会館会議室

分科会1 企業の地域協力=子どもが学ぶ下着教室(株式会社ワコールの協力にて実施)
参加10名

分科会2 地域リーダー活動=ジュニア・リーダー活動と進路=(脇 恵、鈴木 匠)
参加者45名

分科会3 子ども会インターンシップ活動(岡村誠、北島貞一)
参加者28名

分科会4 子どものコミュニケーション能力開発(藺田 碩哉)
参加者46名

分科会5 子どもの創造性開発=好きの発見=(金井 省吾)
参加者32名

アンケート結果や参加者の感想等

- ・委員会において評価会を開催し、開催要項および小冊子について検討した。
- ・分科会の参加者からの反応なども大変よく、基調講演と続いて、基調提案がなされたことがシンポジウムおよび分科会により効果をもたらした。

事業成果の普及・啓発

冊子に記載されていることを参加者が今後地域でどう生かしていくかが課題である。地域での育つ力と育てる力を大いに発揮し、【育つ力と育てる力】を合言葉として地域の教育力を高めることが期待できる。

企画・運営上の課題と対策等

自立を支援するために、いつ何をどのようにするのが課題である。大学生になって自分の進路を見つけることが出来ない学生がいるならば、その前の段階から将来の自己像を描く必要がある。基礎になるのが、地域では、小学校3・4年生の徒党集団の体験が重要であると考え。このことを推進するのが本会の存続理由であろうと考える。各種団体が特長を生かして事業に取り組むことが必要である。

団体のプロフィール

委託先 社団法人全国子ども会連合会

都道府県・指定都市子ども会連合組織の代表者を社員とする社団法人である。自治会・町会を基礎単位とする子ども集団とその育成に当たる大人の組織である育成会が全国に約11万団体（会員数約550万人）あり、市区町村の連合組織を形成している。連合組織は約2,700団体ある。

TEL 03-5319-1741 URL <http://www.kodomo-kai.or.jp/>

青少年の自立支援フォーラム

財団法人 日本ユースホステル協会

1. 趣旨

青少年の健全育成を目的とするユースホステル（YH）運動は、青少年の自立を促す上で重要な役割を果たしている。全国各地にあるYHでの交流体験や、ホステリング（野外旅行活動）により日常を離れて様々な人々と関わりあうことにより自立の意識が強く形成される。YHではYH管理者であるペアレントが、訪れる若者達から人生相談を受けるなど、旅先での親代わりとしての役割を果たしている。自由な旅を続ける若者たちを受け入れ、スタッフや様々な旅人との関わりの中で、YHの業務を体験してもらい、YHペアレントの指導のもとで多くの若者が自立や就業に対する意識を養うなどの役割も果たしてきた。

本事業においては、全国で活躍するYHペアレントを中心として、他の青少年教育指導者や保護者等の参集を得てフォーラムを開催し、今後の活動に役立つような自立支援の手法等について意見・情報を交換し、青少年の自立支援の推進に資することを目的とする。

2. 参加者数 / 応募人数 / 募集人数，地域，対象者年齢等

YHペアレント 130名

青少年教育指導者・青少年団体関係者・保護者等 73名

計203名

3. 活動実施期間及び総泊日数

平成18年10月16日（月）13：30～16：30

4. 活動場所・概要

国立オリンピック記念青少年総合センター「国際会議室」にて青少年の自立支援フォーラムを開催し、基調講演、事例発表、意見交換を行った。

5. 試みと成果、課題

本事業を通じて、全国のユースホステルペアレントや青少年指導者などの参加者はユースホステルの青少年の自立支援に果たす役割の大きさを確認し、また青少年の自立支援にかかわる情報交換や意見交換により、今後の活動に対する知識や意欲を増進することができた。また、本事業の報告書を本協会のホームページ等に掲載することにより本事業の成果を公表することで青少年の自立支援事業の普及を図ることができた。

6. 特徴

青少年の自立支援の推進に資するため、全国で活躍するYHペアレントを中心として、他の青少年教育指導者や保護者等の参集を得てフォーラムを開催し、今後の活動に役立つような自立支援の手法等について意見・情報の交換を行った。

事業の特色

(社)青少年育成国民会議、(社)中央青少年団体連絡協議会、NPO法人ニュースタートに後援いただいた。また、事業推進会議には、各団体の関係者や教育関係者にご出席いただいたことにより、企画・運営等に関して多くの専門的な意見を多数いただくことができた。

運営体制

事業統括責任者：(財)日本ユースホステル協会理事長 家山 勉

フォーラム運営責任者：(財)日本ユースホステル協会事務局長 小俣幸男

フォーラム進行担当：(財)日本ユースホステル協会運動推進部主幹 渡邊美代子

広報担当：(財)日本ユースホステル協会事業推進部

受付担当・接遇担当・会計担当：(財)日本ユースホステル協会運動推進部

事業推進会議：富岡賢治（群馬県立女子大学学長）、上村文三（青少年育成国民会議副会長）、
小林力（中央青少年団体連絡協議会事務局長）、二神能基（ニュースタート事務局代表）、家山勉（本協会理事長）

体験活動の実施

月 日	内 容	実施場所	参加人数
平成18年 10月16日(月) 13:30~ 16:30	フォーラム コーディネーター 二神能基 (1)基調講演「今、若者たちは」 講師：高塚雄介 (2)事例発表 ・「ホステリングと子供たち」 山浦正昭 ・「若者たちとの対話を求めて/お遍路」 川上佳美 ・「ユースホステルと雑居福祉村 との共生」 戒能忠彦 (3)情報交換・意見発表	国立オリンピッ ク記念青少年総 合センター「国際 会議室」	YHペアレント 130名 青少年教育指導 者・青少年団体 関係者・保護者 等 73名 計203名



主催者あいさつ



参加者のみなさま



事例発表

募集方法、広報活動

パンフレットを作成し、全国のYHや中央青少年団体連絡協議会加盟団体を通して事業開催を広く案内した。

アンケート結果や参加者の感想等

- ・高塚先生の基調講演は、具体的で分かりやすく、大変役にたつお話であった。（教育関係者）
- ・事例発表は、それぞれ立場の違う方たちの活動が示され、関心のあるものであった。（青少年団体関係者）
- ・意見交換にもっと時間が取ればより活発な意見が出たのではないか。（ペアレント）

事業成果の普及・啓発

事業内容を詳細に記録した報告書を作成し、青少年関係団体や希望者に配布。また、本協会ホームページで公開した。

企画・運営上の課題と対策等

200名以上の参加者を得ることは、なかなか難しいところではあるが、参加者数の核となるペアレントの参加が多数見込まれたので、集客には大きな苦労はなかった。

団体のプロフィール

委託先 財団法人日本ユースホステル協会

1951年に創立され、国際ユースホステル連盟のもと、日本全国300のユースホステルと9万名の会員を有する。ホステリング(野外旅行活動)を通じ、青少年に社会体験や自然体験、国際交流などさまざまな体験の機会を提供し、青少年の健全育成に資することを目的としたユースホステル運動の普及振興を図っている。

TEL 03-3288-1417 URL <http://www.jyh.or.jp/>

子どもたちの主体性を育む自然体験活動を通じた 地域活動普及事業

社団法人日本ネイチャーゲーム協会

1. 趣旨

自然体験活動であるネイチャーゲームの各指導者は子どもたちの主体性を育む一定の役割を担い、地域や学校など幅広い場面で活動してきた。こうした地域活動を<子どもたちの主体性を育む>といった視点でより充実させ、継続的な実施に向けた地域活動の地盤整備を目指し、自然体験活動指導者を対象とした研修会およびトライアル事業を開催した。

2. 活動実施期間、場所

地域と子どもを取りまく課題とネイチャーゲームの可能性を考える研究交流集会
2007年1月13日 国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

3. 広報活動、普及活動の概要

地域と子どもを取りまく課題とネイチャーゲームの可能性を考える研究交流集会の開催および参加者へのアンケート調査の実施、報告書の作成と配布

4. 試みと成果、課題

「大宮のもり子どもネイチャーゲーム教室」参加者の保護者の回答から読み取れた子どもたちに関する課題と、全国の自然体験活動指導者が抱えている子どもに関する課題とに関連するものが多く見られ、全国的に共通していると考えられる。また、子どもたちを取りまく課題は、地域との乖離などの課題との関連があると考えられ、地域に関する課題についても全国の指導員が共通の認識をもっていることが示唆された。

これらの課題に対して自然体験活動指導者は自然体験活動を効果的であると評価しており、また「地域や子どもの課題」への取り組みに対して、ネイチャーゲームの特性が活かされた成果があるとする指導者は約4分の3を占めることがわかった。しかし、自然体験活動の効果を確固たるものとして示すには調査母数が不十分であり、またネイチャーゲーム組織関係者からの回答しか得られていない。また、子どもを軸にした地域の課題への効果は読み取れるが、地域の課題そのものへ効果は明らかになっていないなど、追加調査が必要である。

5. 特徴

「大宮のもり子どもネイチャーゲーム教室」の開催を通して、地域の方々との間に築いてきた協力体制、信頼関係が「大宮のもり自然教室実行委員会」として形になり、地域における地域主導の自然体験活動の場作りの可能性が開け、子どもたちの主体性を育むための素地ができたといえる。また、地域の大人たちの意識への変化をもたらしたと考えられる。

事業の特色

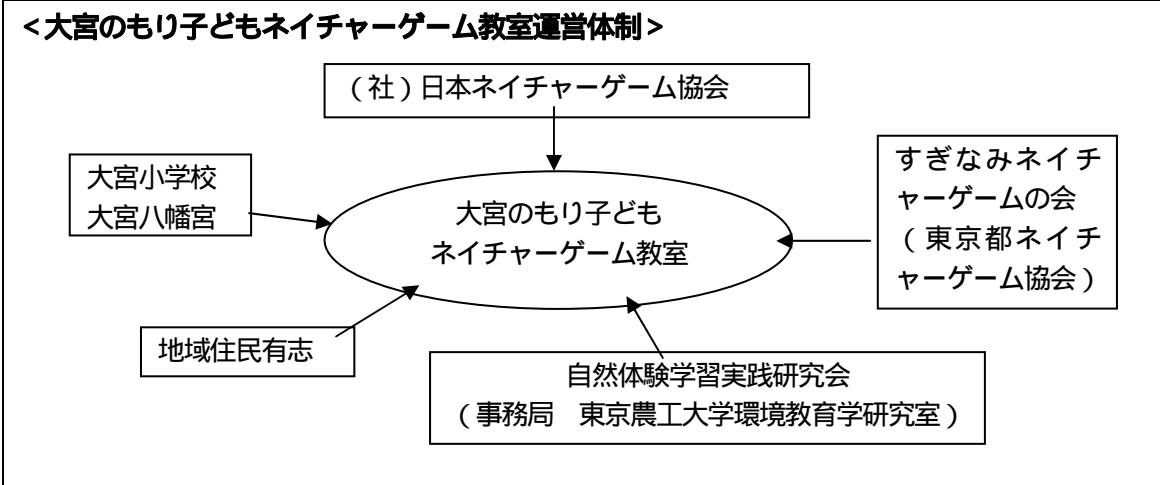
<大宮のもり子どもネイチャーゲーム教室>

大宮小学校または近隣の小学校に在籍する児童とその兄弟姉妹を対象に、大宮のもり（大宮八幡宮の鎮守の杜・キャンプ場と都立和田堀公園の一部）をフィールドとして、放課後や週末に安全かつ安心してネイチャーゲームや自然体験活動を通して自然と遊び、自然から学ぶことのできる「大宮のもり子どもネイチャーゲーム教室」を月2回程度開催し、調査研究スタッフを配置して参加者を対象としたアンケート調査を継続的に実施した。

<地域と子どもを取りまく課題とネイチャーゲームの可能性を考える研究交流集会>

「大宮のもり子どもネイチャーゲーム教室」と同様に全国で展開している「地域子どもネイチャーゲーム教室」をはじめとする自然体験活動に取り組む指導者を対象に、子どもたちの主体性を育む視点をもった継続性・組織性のある自然体験活動に取り組むための組織づくりに向け、自然体験活動の専門組織・指導者としての取り組みのあり方を整理し共有するとともに、課題解決への糸口を得るという趣旨で指導者研修会を開催し、地域における課題や子どもたちを取り巻く課題についての調査を実施した。当日のディスカッション用資料として配布するとともに集計、整理を行った。

運営体制



【募集】地域住民有志

募集チラシを作成、配布し、事前に申込者の名簿を作成する

【当日運営・指導】(社)日本ネイチャーゲーム協会

当日の行事に立会い、開始の挨拶、終了の挨拶を行うほか、行事が安全に運営されるかを確認し、必要があれば他のスタッフとの協議の上で中止等の判断をする

当日のプログラム立案および指導、補助指導員の役割分担や班編成などを行う

【事務局】自然体験学習実践研究会

会計や当日受付のほか、アンケートや備品の準備と回収を行う

【助言・評価・研究】自然体験学習実践研究会・(社)日本ネイチャーゲーム協会

本会の行事の参加者アンケートなどを通して評価と助言を行う

【協力】大宮小学校、大宮八幡宮、すぎなみネイチャーゲームの会(東京都ネイチャーゲーム協会)

フィールド、集合解散場所の提供等、指導補助

広報活動、普及活動の実施

月 日	内 容 (実施場所、参加者数、指導者数、資料等配布先 等)
6月10日	大宮のもり子どもネイチャーゲーム教室(以下、大宮教室)(トライアル事業) 参加者数：子ども4名/大人4名 指導者数：9名 評価スタッフ：2名
6月21日	大宮教室 参加者数：子ども9名/大人0名 指導者数：5名 評価スタッフ：2名
7月2日	大宮教室 参加者数：子ども15名/大人12名 指導者数：6名 評価スタッフ：2名
7月9日	第1回大宮のもり子ども教室運営委員会 参加者数8名(うち2名評価スタッフ)
7月19日	大宮教室 参加者数：子ども5名/大人0名 指導者数：2名 評価スタッフ：2名
8月6日	大宮教室 参加者数：子ども2名/大人2名 指導者数：2名 評価スタッフ：2名
8月16日	大宮教室 参加者数：子ども1名/大人0名 指導者数：4名 評価スタッフ：2名
9月27日	大宮教室 参加者数：子ども6名/大人0名 指導者数：4名 評価スタッフ：2名
10月15日	大宮教室 参加者数：子ども3名/大人3名 指導者数：2名 評価スタッフ：2名
10月18日	本調査に向けた事前調査の実施 配布先 地域子どもネイチャーゲーム教室(居場所事業)担当者および教室開催都道府県ネイチャーゲーム組織(94通)
10月25日	大宮教室 参加者数：子ども2名/大人0名 指導者数：3名 評価スタッフ：2名
11月11日	大宮教室 参加者数：子ども2名/大人2名 指導者数：5名 評価スタッフ：2名
11月22日	大宮教室 参加者数：子ども5名/大人0名 指導者数：1名 評価スタッフ：2名
11月26日	第2回大宮のもり子ども教室運営委員会 参加者数6名(うち2名評価スタッフ)
12月1～27日	地域と子どもを取りまく課題とネイチャーゲームの可能性を考える研究交流集会の案内送付
12月10日	送付先：関東圏指導員、居場所事業関係指導員、都道府県ネイチャーゲーム組織、日本ネイチャーゲーム協会理事(2765通)
12月20日	大宮教室 参加者数：子ども4名/大人2名 指導者数：2名 評価スタッフ：2名
1月13日	大宮教室 参加者数：子ども4名/大人0名 指導者数：3名 評価スタッフ：2名
1月21日	地域と子どもを取りまく課題とネイチャーゲームの可能性を考える研究交流集会開催 参加者数：43名
1月31日	大宮教室 参加者数：子ども7名/大人5名 指導者数：4名 評価スタッフ：2名
2月13日	大宮教室 参加者数：子ども9名/大人0名 指導者数：2名 評価スタッフ：2名
2月18日	地域と子どもを取りまく課題とネイチャーゲームの可能性を考える研究交流集会アンケート結果集計資料の配布 配布先 地域ネイチャーゲームの会・都道府県ネイチャーゲーム組織・ネイチャーゲームコーディネーター・インストラクター(489通)
2月24日	大宮教室 参加者数：子ども5名/大人4名 指導者数：2名 評価スタッフ：2名
2月28日	大宮教室 参加者数：子ども10名/大人2名 指導者数2名 評価スタッフ：2名
3月7日	大宮教室 参加者数：子ども9名/大人0名 指導者数3名 評価スタッフ：2名 報告書発送 送付先：都道府県ネイチャーゲーム協会など(65件)

アンケート結果や参加者の感想等

「大宮のもり子どもネイチャーゲーム教室」参加者の保護者の回答から読み取れた子どもたちに関する課題（集中力がない、コミュニケーションが苦手、遊び方を知らない）は、全国の自然体験活動指導者が子どもに関して抱いている課題（コミュニケーション能力の不足、活動意欲の低下、体験不足）と関連するものが多く、全国的に共通していると考えられる。また、塾や習い事からくる「忙しさ」を課題と感じている指導者もいる。



フィールドビンゴ

体験不足、コミュニケーション不足、地域との乖離などの課題との関連があると考えられる。地域に目を向ければ、共同体意識の低下、大人の自然体験への意識の低さ、また、大人自身が体験不足であるとの指摘があり、これらも大宮のもりにおいてスタッフが抱く課題と共通している。

こうした課題に対して自然体験活動指導者は自然体験活動を効果的であると評価しており、また「地域や子どもの課題」への取組に対して、ネイチャーゲームの特性が活かされたとする指導者は約4分の3を占めることがわかった。

事業成果の普及・啓発

地域と子どもを取りまく課題とネイチャーゲームの可能性を考える研究交流集会の開催および参加者へのアンケート調査の実施、報告書の作成と配布（以下の内容）

- ・地域子どもネイチャーゲーム教室（文部科学省子どもの居場所事業）活動実績
- ・地域と子どもを取りまく課題とネイチャーゲームの可能性を考える研究交流集会調査結果
- ・大宮のもり子どもネイチャーゲーム教室の取り組み

企画・運営上の課題と対策等

「大宮のもり子どもネイチャーゲーム教室」において、当初は各回のプログラム内容に関連性や流れをもたせる内容を目指した。しかし、季節を活かしたアクティビティの選択など、ある程度の関連は目指したものの、後半の活動で流れは切れてしまった。一方で、過去に体験したアクティビティを希望する子どもたちの声や新規参加者の増加に対して臨機応変な対応を行うことで参加者のニーズに対応した結果、良い感想を得られた。

しかし「大宮のもり子どもネイチャーゲーム教室」「研究交流集会」ともに調査母数が不十分であり、また、ネイチャーゲーム組織関係者からの回答が多くを占めているため、調査対象を広げ、継続して実施する必要がある。また、子どもを軸にした地域の課題への効果は読み取れるが、地域の課題そのものへの効果は明らかになっていないなど追加調査が必要である。

団体のプロフィール

委託先 社団法人日本ネイチャーゲーム協会

米国ナチュラリスト、ジョセフ・コーネル氏が考案した自然体験プログラム、ネイチャーゲームを普及・振興している。ネイチャーゲームは、いろいろなアクティビティを通して自然の不思議や仕組みを学び、自然と自分が一体であることに気づくことを目的としている。現在100種類以上のアクティビティがあり、自然に関する特別な知識がなくても、豊かな自然が持つさまざまな表情を楽しむことができる。

T E L 03-5363-6010 U R L <http://www.naturegame.or.jp>

青年長期ボランティア計画普及啓発事業

社団法人 日本青年奉仕協会

1. 趣旨

青年長期ボランティア計画とは、青年が全国各地の活動先に長期間滞在し、ボランティア活動に専念するプログラムであり、社会課題に取り組む団体などへの「貢献」と青年自身の「学び」を目的としている。

本事業においては、長期社会奉仕体験活動の認知度を高め、青少年が心豊かに生きるために必要な奉仕体験活動の普及・啓発を図り、青年と保護者、教育関係者、ボランティア活動団体に長期社会奉仕の実践活動を紹介し、体験の場づくりの開発と参加者層の拡大を行い、青少年の自立を支援する。

2. 活動実施期間，場所

平成18年6月～平成19年3月。国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)をはじめ全国各地で実施、開催。

3. 広報活動，普及活動の概要

- ・ポスター、リーフレットの作成...長期社会奉仕体験活動を広く周知する
- ・地域説明会の実施...活動経験者、実際に活動している人を交えて普及啓発した
- ・受入団体研究協議会の実施...長期社会奉仕体験活動の活性化と普及啓発についての方策を研究協議した
- ・アンバサダー研修の実施...地域説明会の実施などに関する研修
- ・全国フォーラムの実施...これまでの成果や長期の活動を実際に経験した青年の声などを発信した

4. 試みと成果、課題

ポスター、リーフレットを広く配布し、普及広報に役立てた。また、ウェブサイトの構成を見直し、専用サイトをオープンして、より説得力のある情報提供を行った。

昨年度よりは改善しつつあるが、個々の地域説明会での、参加人数をより多くしていくことが課題である。

5. 特徴

青年が全国各地の活動先に長期間滞在し、ボランティア活動を通しての社会貢献活動と学びの機会を提供するプログラムに、参加しようとしている青年と、その青年たちを受け入れる活動先をつなぐための、普及啓発、募集広報を実施する。

事業の特色

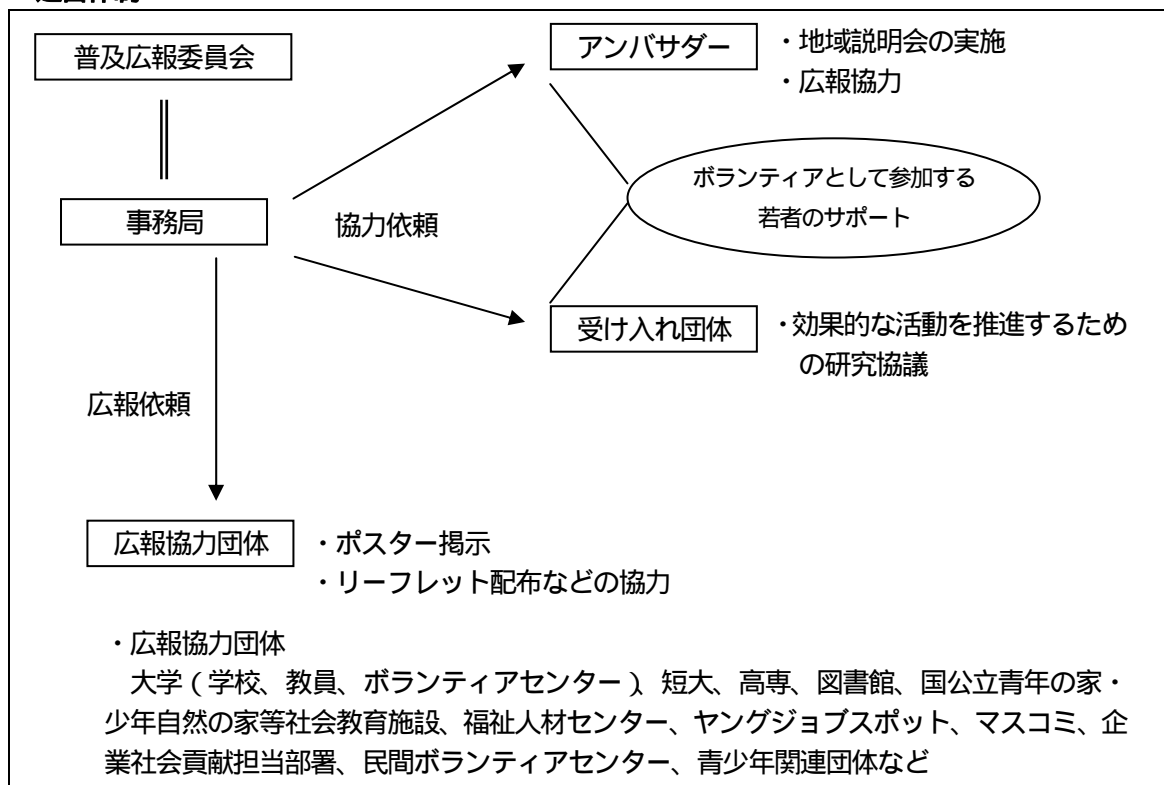
長期社会奉仕体験活動の認知度を高めることによって、より多くの若者に参加の機会を普及・広報するために、地域説明会や全国フォーラムの開催を通じて、青少年のみならず教育関係者、ボランティア活動団体に長期社会奉仕の実践活動を紹介した。

地域説明会をきめ細かく実施することとあわせて、他団体のイベントにブース出展し、より多くの人への周知を図った。さらに、大学やボランティア活動団体、中間支援団体などに対して、普及・啓発の協力要請を行った。

大学ボランティアセンターなどの参加もあった全国フォーラムでは、活動者の生々しい体験報告とフォーラム参加者と1年間のボランティア活動経験者による車座座談会を行った。

長期社会奉仕体験活動の意義と効果、現状を普及啓発し、多くの人が計画への理解をより一層深めることができ、青少年の自立支援を促進に資する活動ができた。

運営体制



広報活動、普及活動の実施

月 日	内 容 (実施場所、参加者数、指導者数、資料等配布先 等)
平成 18 年 6 月 ~ 平成 19 年 3 月	長期社会奉仕体験活動を青年や社会に周知し、理解を深めるために普及啓発ポスター、リーフレットを活用し周知、広報（大学、公共機関、青少年関連団体など）。ボランティア活動先資料や活動体験集によって普及啓発を行った。
8月～12月	地域説明会による普及広報（開催日時、場所、参加者数は別表） 実施回数：32回（内訳：東京都：11回、その他地方：21回）
7月14日～15日	受入団体研究協議会（20団体、20名参加） 効果的な活動を推進するための研究協議を行った。
7月15日～16日	アンバサダー研修（21名参加） 青年を対象とした長期社会奉仕体験活動を普及広報するための「アンバサダー」を養成した
平成19年	全国フォーラムの開催（報告者による準備および運営）（約150名参加） 長期社会奉仕体験活動の理解を促進するために開催し、参加経験者や推進関係者の活動報告などによる普及啓発を行った。
3月3日	全国フォーラムの実施 内容：活動報告の展示 活動者による報告 車座座談会
3月1日～4日	平成18年度青年長期ボランティア計画報告者による準備および運営
平成19年	普及広報委員会
2月2日	第1回会議 テーマ：事業概要の説明、昨年度委員会の報告、Web広報のありかたについて
2月16日	第2回会議 テーマ：Web広報のありかたについて
2月23日	第3回会議 テーマ：次年度以降の広報戦略についての意見交換
3月6日	第4回会議 テーマ：広報全般についての検討、広報戦略について、事業の評価

アンケート結果や参加者の感想等

- ・若者の意見が聞けて良かったです。
- ・時代を映しているなと想った
- ・不器用さが純粹さを引き出していた
- ・短時間に的確にまとめてあって良かった。全員の発表を聞きたいくらいです
- ・1人ひとりが体験したこと、感じたことの違いがよく分かりました
- ・何をしてきたかよりも何を感じたかが興味深かった
- ・みなさんすごく充実していたのだろうなという表情で、話もわかりやすかった
- ・座談会すごく良かったです。久々の報告会でしたが、たくさん刺激をもらいました。また参加したくなった

事業成果の普及・啓発

普及広報委員会の議論や活動経験者による全国フォーラムの中で得られた青少年の自立に対する取り組みを、インターネットや次年度の事業広報に併せて広く全国へ普及していく。また、大学の教員に依頼し、授業などで取り上げていただけるようにしていただくことで、事業の参加者層である若者に周知していきたい。

企画・運営上の課題と対策等

地域説明会や全国フォーラムの広報が十分ではなかったためか、なかなか参加人数が多く集まらず苦労をした。

今年度実施したポスターやリーフレットなどの紙媒体を送付する方法の有効性は、ある程度の成果を上げることはできるが、より大きな成果を上げるためには、インターネットでの広報の充実やマスコミへの露出、大学の授業として取り入れてもらうことなどより多くの人の目に入る形での普及広報活動を目指していく。

団体のプロフィール

委託先 日本青年奉仕協会

設立以来、国内のボランティア・グループや団体、学校、企業、研究機関、さらに世界のボランティア推進機関、団体にも幅広いネットワークを築き、ボランティアに関する相談、助言、情報提供、活動の場の提供、研究や交流の場づくり、研究開発、出版活動、国際交流などを行っている。

T E L 03-3460-0211

U R L <http://www.jiva.or.jp/>

幼少期における自然体験活動がもたらす効果に関する普及啓発

NPO法人自然体験活動推進協議会

1. 趣旨

青少年の社会的自立を促すためには、青少年期における豊富な体験活動によって主体性や社会性を育むことが極めて効果的である。また、幼少期から自然体験活動の機会が十分に与えられている青少年ほど、青少年期に行う自然体験活動の効果が高まることが指摘されている。

以上を踏まえ、これまでに年少児童を対象とした自然体験活動プログラムの実施経験有する自然体験活動推進協議会の会員団体と、幼少期における自然体験活動の効果等に関する研究を行っている研究者や自然体験活動実践者などの有識者によるシンポジウムを行い、青少年の自立支援に資する幼少期の自然体験活動のあり方やその必要性などに関する普及啓発を行う。

2. 活動実施期間，場所

開催日時：2007年2月18日（日）午後2時～5時

開催会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

参加者：200名

3. 広報活動，普及活動の概要

シンポジウムの成果をまとめた普及啓発用のパンフレットを作成し、全国の青少年教育関係施設および自然体験活動団体等へ配布する。また、シンポジウムの内容を紹介するホームページを作成し広く全国に普及する。

4. 試みと成果、課題

「幼少期における自然体験活動の必要性和効果について」

基調講演：「幼少期における自然体験活動の効果について」

飯田 稔（びわこ成蹊スポーツ大学 副学長）

パネルディスカッション：「今なぜ、幼少期における自然体験活動が必要か」

パネラー：飯田 稔（びわこ成蹊スポーツ大学 副学長）

星野 敏男（明治大学 教授）

園田 碩哉（さんさん幼稚園 理事長）

内田 幸一（子どもの森 幼稚園 創設者）

コーディネーター：佐藤 初雄（NPO法人国際自然大学校 理事長）

司会：重 政子（NPO法人自然体験活動推進協議会 理事/事務局長）

5. 特徴

これまでの実績データや具体的な事例をベースにした幼少期の自然体験活動の効果について学術的な視点から知る機会をもつことができた。また、幼少期における自然体験の実践者の方たちの経験や考えに触れることができた。

事業の特色

青少年の社会的自立を促すためには、青少年期における豊富な体験活動によって主体性や社会性を育むことが効果的であり、幼少期に自然体験活動の機会が十分に与えられていた青少年ほど、青少年期に行う自然体験活動の効果が高まることが指摘されている。また、中央教育審議会の答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」においても、幼少期における自然体験活動の必要性が指摘されている。

基調講演者である飯田稔先生（びわこ成蹊スポーツ大学 副学長）は、5歳児を対象に1996年より3泊4日、1975年からは4泊5日のキャンプを続けてきており、このような長年の実績データと具体的な事例をベースに幼少期における自然体験活動の効果についてご講演いただいた。「親は子どもの能力を過小評価している」「キャンプを通して自立心と自主性が高まる」「子どもが自然体験をするきっかけは、外部からの促しとプッシュが必要」など、興味深い話が続いた。

パネルディスカッションでは「今なぜ、幼少期における自然体験活動が必要か？」をテーマに以下のパネラー4名によるディスカッションを行った。

パネラー：飯田 稔（びわこ成蹊スポーツ大学 副学長）

星野 敏男（明治大学 教授）

藺田 碩哉（さんさん幼児園 理事長）

内田 幸一（子どもの森 幼稚園 創設者）

コーディネーター：佐藤 初雄（NPO法人国際自然大学校 理事長）

- ・ 子どもの森幼稚園の子どもたちは、いつも川・山で遊んでおり3年間で600日ぐらいを自然の中で過ごしており、この3年間でエベレストに登るぐらいの距離を歩いている。そのため体力は抜群。
- ・ さんさん幼児園では、東京都内の開発にとり残された里山が園庭になっており、子どもたちは思い思いに自然の中で遊びをつくっており、多様な身体の使い方を覚えていく。自然は最大の教育者である。
- ・ 幼少期は認識力を急速に獲得していく時期、つまり言葉の意味がよくわかるようになる時期である。幼少期の間に自然体験を豊富にさせておかないと、言葉の意味を具体的な概念として理解できていかないのではないか。幼少期には体験やカラダを通して気がついて覚えるということが大切である。

上記以外にも、様々なディスカッションが繰り広げられ、基調講演およびパネルディスカッションの詳細については下記サイトにて公開している。

CONEトップページ (<http://www.cone.ne.jp>) より

「幼少期の自然体験活動シンポジウム」をクリック

もしくは、

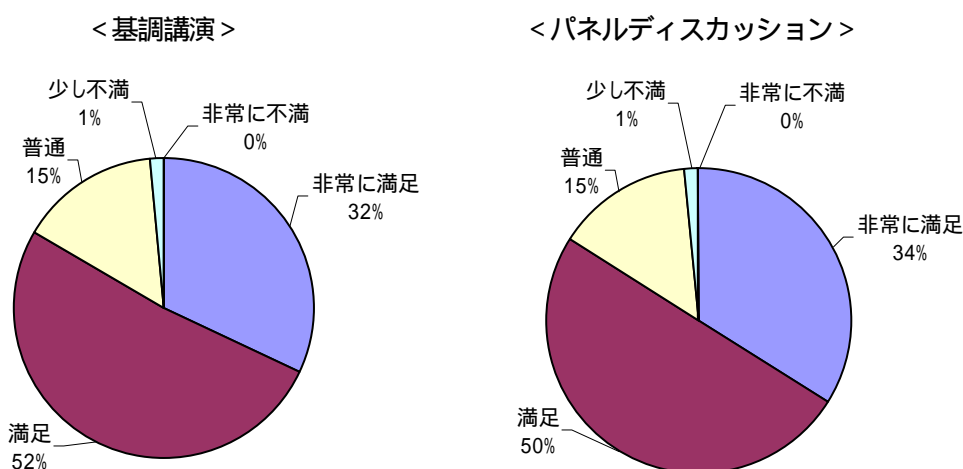
下記のURLに直接アクセス

http://www.cone.jp/html/special/yosyo_sympo2007/

広報活動、普及活動の実施

月 日	内 容 (実施場所、参加者数、指導者数、資料等配布先 等)
2月18日(日)	開催日時：2007年2月18日(日)午後2時～5時 開催会場：国立オリンピック記念青少年総合センター 参加者：200名

アンケート結果や参加者の感想等



事業成果の普及・啓発

シンポジウムの成果をまとめた普及啓発用のパンフレットを作成し、全国の青少年教育関係施設および自然体験活動団体等へ配布する。また、シンポジウムの内容を紹介するホームページを作成し広く全国に普及する。

企画・運営上の課題と対策等

今回のシンポジウムにおいて、指導者や親の子どもへの対応の仕方や接し方こそが重要であることが指摘されたことから、幼少期における自然体験活動を促進していくためには、幼少期の子どもにの特性に配慮した対応方法や指導方法が自立支援のカギを握るものと考えられる。今後、幼稚園・保育園・学校の先生などの幼少期の子どもを指導する立場にある人材の育成が重要な課題になってくるものと思われる。自然体験活動を通して、感動するよるこび、自然を大切にする気持ち、人と人とのつながり、土地の文化や社会との共存、安全への意識などを子どもたちが身につけるきっかけにできるように支援する指導者を育成するための方策について検討していく必要がある。

団体のプロフィール

委託先 特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会

平成11年1月に発足した「自然体験活動指導者研究会」には、我が国を代表する90を超える関係団体が参加した（会員団体数は約270団体）。また、当時の関係省庁の担当者も参加し、民間主導ながらも各省庁の高い関心を集めた。この研究会では、個々の団体の指導者養成制度について、互いの連携をはかることや一定レベルでの基準づくりの可能性を探りながら、指導者のあり方から、各団体の指導者養成カリキュラムをベースとした共通カリキュラムの作成、それに応じた各団体の研修内容、研修終了者の登録制度（登録指導者数 約24,000人）について議論を重ねてきた。当協議会は、「自然体験活動憲章」の精神に基づきながら、自然を舞台とした全ての自然体験活動の促進に寄与していくことを理念としている。そして、自然体験活動の調査研究や普及・啓発などを通して、子ども、青少年をはじめとする多くの人々の自然体験活動の推進を行ない、あらゆる民間機関、団体と企業および政府・地方公共団体とのパートナーシップの確立を図ることを目的としている。分野や地域を越え、自然体験活動に取り組む人々や、機関、団体間の連携によって、自然体験活動指導者の登録・活用をはじめとして、様々な交流支援事業を行なっている。

T E L 03-5363-2501

U R L <http://www.cone.ne.jp/>